

巻頭言 「蜜のように甘い」

宇野 元

ライラは謎が多い。夫エイズは、彼女が聖書を読んでいるのを見て喜び、横からその箇所をのぞきます。すると、聖書になじみのない彼女がエゼキエル書をひらいています。エイズは意外に思います。もっとよい箇所があるだろうに。エゼキエル書は最初の一步にはむいていないのじゃないか。ところがライラは、ヨブ記が興味深いと言い、エゼキエル書が面白いと言います。エイズはますます驚いてしまいます。ああエゼキエルか、詩的な書だ、と、牧師である夫は説明をはじめますが、それには関心がない様子。まあ、これもいいが、聖書にはほかにもいろいろあるよ。初心者にエゼキエル書は難しいと考えるエイズは、たとえばマタイ福音書はどうかな、と水を向けます。しかしライラはこれらの書に親しみを感じていました。苦難が身近なことであったから。そして自分のことが記されていると思ったから。(ギレアド・シリーズ第三作『Lila』より。)

詩的なエゼキエル書。語りかける言葉があります。「人の子よ、自分の足で立て」と。「わたしは語りかけるものに耳を傾けた」(2, 1.2)。そして不思議な巻物が。巻物のおもてにも裏にも、哀歌、うめき、嘆きの言葉が記されています。エゼキエルはそれを食べるよう勧められます。彼は食べます。すると苦難にみちた言葉がえもいわれぬ味わいになります。「それは蜜のように甘かった」(3, 3)。

極めて大切なことが示されます。すなわち「耳を傾ける」こと。聖書の言葉が語られる。神の言葉の宣べ伝えがなされる。それに傾聴する。

力を失い、倒れている。それがもういちど立ち上がる。このことをエゼキエルは経験します。聖書の預言者の経験は、代表としての意味をもちます。倒れている民が再び立ち上がるようにされる。私たちも倒れます。そして、もう立ち上がれないと思います。しかし立ち上がるようみちびかれます。再び、三たび！ 養い手の言葉に傾聴することで。

私たちの歩みはままなりません。そのような中であって錯覚します。自分の思い通りになる歩みがよい人生であると。ひるがえって、そうっていない自分の状態を嘆きます。また、そうならない周りの状況に絶望します。しかし、そのような私たちに神の言葉が差し出されています。私たちが受け取り、よく噛んでみるように。えもいわれぬ味わいを知るように。力を得て、前に進むことができるように。